

私の軍歴とシベリア・

クラスノヤルスク

第三收容所の体験記

大分県 中谷 孝

入隊から終戦までの軍歴

昭和十九（一九四四）年十月十五日に都城に入隊し、予防接種のため二泊して、都城駅より軍用臨時列車で門司駅に到着。門司港より貨物輸送船に乗船、一泊して出港したが、港を出て三十分ほどした玄界灘で空襲警報が二回発令された。それから釜山經由でソ満国境ハイラルに到着し、関東軍北滿ハイラル第二八三部隊に現地教育の予定で入隊した。

しかし、二八三部隊は留守。滿州ハイラル第一一九師団歩兵二二五連隊（防諜第五一五部隊）第一大隊第三中隊（杉崎隊）ハイラル一地区のアンポの陣地に

行った。杉崎隊は東山の二八三部隊の兵舎に移動した。杉崎隊の二班（軽機関銃班）で教育上等兵の玉城善人の当番、名古屋からの補充兵は剣と竹の水筒を持って来た。二五五連隊は新設のため、新しい軍旗の軍旗祭が行われた。

東山の演習場での補充兵との騎馬戦で、演習中に補充兵を庇って二人とも落馬して、ハイラル東山の陸軍病院に入院したが二日間で治癒し、その後は衛生兵が不足しているために病院で使役に従事した。退院後はハイラルから扎蘭屯ジャラントンの杉崎隊の留守部隊に帰った。

九州代表の遺骨護送の命令を受けた。ハイラルの東山本願寺に行き、遺骨を受け取りハイラルの忠霊塔に納め、分骨して日本に持ち帰る分は扎蘭屯の内務班の渋谷曹長のところに行つて、翌日、日本に護送すべく命令を受けた。次の朝、遺骨護送は中止となった。

嫩江ニンコウ一三六師団、三七五七八部隊（挺身大隊に転属）長友隊の二中隊で戦時訓練を受けた。

昭和二十年八月十一日出陣式。軍帽、軍服、軍靴、下着等すべて新しい物を支給され、全部新しい物にか

えた。

嫩江より部隊はハルビン警備のため南下、二晩雨中夜行行軍をし、チチハル駅の構内で終戦を知り、八月十五日、チチハル郊外の兵器廠のホームで玉音放送に接した。長友隊は次々と兵舎を移動していた。ホームのテントの中で房前、坂本、中谷三人は（三人とも大分県人で水入らずの仲）被服、食料、弾薬の監視をした。その時の坂本は在満の召集兵で、満語が得意で毎日、満人がごちそうを運んで持ってきてくれた。

それからソ連が参戦してきて武装解除された。長友隊に三人は復帰した。終戦と同時に韓国の兵隊が全員逃亡した。それからクラスノヤルスクの第三收容所に收容された。

それまでの出来事として、日本の軍人の死体は軍服を着たまま、軍人以外の日本人の死体もそのまま放置されていた。ソ連の軍人は丁寧に埋葬されていたのが満鉄沿線から見られた。

シベリアに向かう途中、チタを過ぎて蒸気機関車に

給水するために停車した駅で、飲料水の確保のため乾パンの空き缶に水を汲んでいたが、途中、軍服が濡れたために貨車の中に干していたら、その軍服並びに武運長久の日の丸の旗と千人針を民間のソ連人に持って行かれた。ソ連の警備兵が、貨車に穴が開いていたのは中谷が興安嶺で逃亡するために穴を開けたと言いがかりをつけ、銃殺にすると銃を付きつけたが、通訳の猿渡が、中谷は中隊の本部にいたのでそういう人ではないと弁明してくれたので、ソ連の警備兵は銃をおさめた。

ソ連のクラスノヤルスク第三收容所の死亡者の第一号は收容所に到着した日に発生したが、それは町の風呂に入った時に初めて知った。なお、死亡者名簿は全員のを持っている。

満州現役当時、特別に行った場所

錦州城、爾靈山、ハルビン郊外の湖の魚とり

クラスノヤルスク第三收容所の組織図

人員

熊谷隊第一大隊 鈴木隊第一大隊

将校 クラスノヤルスク地区二百人

転出 体の弱い人 百人くらい

三七五七八部隊の第一大隊名簿

大隊長 熊谷直次郎 在満召集兵 熊本県

大隊副官 坂本八郎 大分県

一中隊長 山本

二中隊長 長友光男 在満召集兵 宮崎県

三中隊長 島田

一小隊長 島崎稔 福岡県(異国の友名簿に記載)

二小隊長 房前皆吉 大分県(異国の友名簿に記載)

三小隊長 門沢

炊事班長 川野一二三

炊事係 奥村二郎?

炊事係 池田作馬

入隊―終戦―抑留―復員して五十年、一日も忘れ
たことのない人(死亡者・消息不明者を含む)の

住所氏名

大分県内

日田市 坂本八郎

津久見市 坂本辰美

佐伯市 藤田健

佐賀関町 渡辺基

日出町 中野豊

臼杵市 川野一二三 北山猛

大分市 長岡慶事 池田作馬

福岡県内 葛原生人

熊本県 松本孝

鹿児島県 野本勇

大阪府 相見利嗣 寺島富之

福島県 大野昌二

山口県 くにひろ?

秋田県 河村辰生

山城?

ハイラル陸軍病院(第三病棟)

副院長 神谷軍医

看護婦 岡崎文子 (富山県?)

看護婦 つのとしこ (富山県?)

入院患者 瀬戸山直 (宮崎県)

入院患者 篠原敦 (宮崎県)

入院患者 小林 (印鑑作成指導者・四国?)

クラスノヤルスクの収容所

ソ連人 軍医 ナターシャ 軍医 マアリンキ

日本人 軍医 高野正好

日本人 衛生兵 渡辺基 佐々木三郎

河村辰生(秋田県) 田中三郎

西山?

メハナ作業所

所長 ザヘルマン

監督 ニコライ

作業班長 マルーシャ

作業班長 アーニャ

抑留中の作業

中隊の監視と食事の世話

エニセイ川のほとりの製材所での原木の整理(一個

小隊)

メハナの機関車工場隣接の建築現場の作業(コンク

リートミキサの取扱い)

コルホーズ農場のジャガイモ掘り(一個小隊)

死体埋葬(冬は凍結のために仮埋葬して、春に本埋

葬。半年たっても全く死体は変化していなかった)

死体は棺の中に入れて櫛に積み、ロバに引かせて墓

地に行き、棺は開けて持って帰り再度利用した。

認識票を数珠の代わりに胸にかけて手を合掌さし

て、頭を上にして緩やかな斜面に埋葬した。

最初は木の墓標、四角で一边が十センチで長さが一

メートル。一部は鉄の丸い墓標で、直径が十センチで

長さが一メートルくらい。

抑留中に困ったこと

水がなかったこと。

風呂にめったに入れなかったこと（蚤に悩まされた）。風呂は蒸し風呂で、水は洗面器に一杯ずつ。

風呂に入った時に夏は軍服、下着とも風呂場の滅菌室で、冬は軍服、下着を凍らせて蚤を退治した。

食料の不足（作業ノルマに対して食料を支給）。

マッチがなく、火打石と鉄をこすって火縄に火をつけた。

薬がなく、牛馬の骨を焼いて薬の代用にした。

その他抑留中の出来事

最初は食事は中隊に配給されたが、炊事場が良くなってからは各人がチケットで炊事場にもらいに行った。また、炊事用の水は町から桶に積み、ロバに引かせて収容所に運んでいたが、一年ぐらいしてからは井戸を掘った。

遺品は内務班の検査でソ連に没収された。

入浴は月一回で、町の風呂屋に行つて入浴した。

身体検査は年三回くらいで、尻と腕の皮膚を引っ張つてソ連軍医が診察した。また、ラッパのような聴診器で病人を診察した。診断の結果、その症状により一―三級及び病人に区別した。

クラスノヤルスク地区にノモンハン事件の生存者がいた。その中の二人に会つて話をしたが、妻子もあり、東北弁で話す人だったが、出身県は教えてくれなかった。多分、戦死扱いになつていたらだろう。

ドイツ人の抑留者も作業をしていた。

ソ連は国営のためソ連の囚人も作業に従事していたが、逃亡する囚人に対して作業所の監視員は銃を発砲した。銃声が聞こえた後は、射殺された囚人が帯で体を締められ棒で担がれて運ばれて行くのに何回も出会つたが、担いで運ぶ作業をするのも二人のソ連囚人だった。

終戦のときにチチハルで経験したこと

チチハル市内の弾薬庫やガソリンタンクが大爆発を起こし、市内が一面、火と血の海となった。

復員中の出来事

ナホトカ第一收容所（テント）に收容された者はその日のうちに復員船に乗船したが、第二收容所に收容された者は教育を受け、一週間くらい後に復員船に乗船した。そして第三收容所に收容された者は、再びどこかに送り返され、日本に復員したのか、いまだに確認していない。

私はナホトカ第二收容所に收容されたので一週間の教育を受け、ナホトカから復員船の米山丸に乗船し、船内で抑留中の死亡者名簿等の調査カードを提出した。

ソ連から日本に持ち帰った物

印鑑（手製・中谷）

タバコ（マホルカ）とタバコのケース（手製・相見

利嗣）

食器（水筒、飯盒）

スプーンと箸（手製・中谷）

腕時計

凍らないセメント

軍服と外套

異国の友に出席した際の記念品―五周年記念（中央大学葉山寮）

財布

昭和四十四年十二月一日現在の名簿

昭和四十九年十二月一日現在の名簿

昭和六十一年十二月一日現在の名簿

異国の友に出席した際の記念品―二十五周年記念（中央大学葉山寮）

置き時計

異国の友に出席―昭和六十一年（中央大学葉山寮）

遺骨の収集には自信あり（死亡者名簿に記載されていない死亡者も知っている）。

今現在、西本願寺派福勝寺門徒総代。

証拠書類は保存している。

この資料の作成協力者

渡辺基 (大分県佐賀関町)

吉岡四郎 (大分県臼杵市)

平成十二(二〇〇〇)年吉日、シベリア慰霊墓参団
クラスノヤルスク地区第八班団長、越智健一(副団
長・村田みつ)他、遺族と全抑協出席者一同、結団式
を大変感謝します。

私の人生の夢が実現し最高の幸せいっぱいです。人
生一生進歩がないと言うが、歳を忘れ趣味(魚釣り)
を持ちポケないように注意し、食物は腹八分目と健康
に注意してクラスノヤルスク墓参ができました。

クラスノヤルスク州、クラスノヤルスク市と現地
に、日本政府が一体となった協力により立派な慰霊
碑が建立されたことを感謝します。

私のいた第三收容所内の給水塔と機関車工場を見学
して参りました。

最後に、大変残念なことは、第三收容所の十列墓地
の埋葬した場所が全く違う所でした。

現地に植樹した桜の樹が大きくなるとともに、また
逢う日をお待ちしています。

追伸 楽しさは春は桜、秋の月、家内達者で三度食
べる飯。